

論文要旨

日本古代における都城の形成と特質

古内絵里子

本稿は、日本の都城の空間変化とその背景・要因を解明した上で、東アジア都城史上における古代日本の都城の特質を論じたものである。

序章では、これまでの古代都城研究についてまとめ、問題意識を披瀝した上で、その基本的課題と視座について説明を行った。

第一部「日本古代における都城の成立と展開」第一章「七世紀における大王宮周辺空間の形成と評制」では、七世紀の「みやこ」の実態を考察し、大王宮そのものだった「みやこ」が、七世紀半ばの孝徳朝に大王宮周辺までも含む空間に変化したことを明らかにし、その現出要因が大化改新の官制変化と評制施行という二つの政策にあることを論じた。大王宮周辺空間の成立は、まさに京城の出現であり、七世紀後半の都城制導入への大きな転換点となった。

第二章「儀礼空間としての都城の確立—藤原京から平城京へ—」では、藤原京から平城京へと都城構造、とくに京南面の中軸線上部分が大きく変化したのは、遣唐使の再開で唐礼がもたらされたことで儀礼空間としての都城の役割が求められるようになったからであった。そこで、儀礼という王権の支配秩序のための機能を有するため、新たに長安型の平城京が造られ、儀礼空間としての都城が確立した。

第三章「保良京の史的意義」では、保良京に関する政策と藤原京から平安京までの遷都手続の比較検討を行い、保良京が従来考えられてきた副都ではなく、淳仁朝の新たな首都となるために造られた都であったことを指摘した。また、長岡京・平安京に先立つ新たな遷都政策がとられたことから、保良京は長岡京や平安京における造営・遷都政策の先蹤となった都であり、日本古代の都城史上、奈良時代後半以降の都城の画期となったことを明らかにした。

付論「日本における古代山城の変遷—とくに鞠智城を中心として—」では、八世紀から九世紀以降の古代山城の実態と変遷の検討し、八世紀の古代山城は大宰府の直接の管理下にあった施設であり、鞠智城は養老四年の対隼人征討の主要な補給基地としての役割を担ったことを指摘した。また、九世紀では、新羅海賊の出現の頻発による国際関係の緊張により、再び鞠智城・大野城は古代山城として需要が高まったことを論じた。そして、約二百年もの間めまぐるしく変化する西海道情勢で、その役割を果たしたと考えられる。

第二部「日本古代における都城の構造と特質」第一章「坊令の成立」では、奈良時代の坊令が、四坊（条）という領域の行政・治安などを管理し、かつ京職の雑事を行う役人であったことを論じた。また、坊令という日本独自の都を管理する官人を創出したのは、「京」が在地首長層の郡司を

行政に介入させず、坊を行政の基本単位としていたため、坊を複数ごとにまとめ管理・統括する京職の役人が必要となったからであった。そこで、唐の坊正と里正の職掌を継受し、四坊を管理するという日本独自の坊令という官人を生み出した。

第二章「日本古代における坊制の採用」では、日本古代において、首都のみ行政の基本単位が里ではなく坊であった要因について検討を行った。その結果、「京」の行政の基本単位を戸数に基づく里ではなく、土地区画に基づく坊としたのは、遷都の際、坊を行政単位とすれば、遷都先の同じ坊に京戸の本貫を移すことができ、戸籍や計帳、税の徴収などをはじめとする都の行政管理の連続性を保つことができるからであった。つまり、「京—四坊—坊」という日本独自の行政体系は、円滑な行政・経済運営の連続性の観点から王権の維持に実質的な裏付けを与えるものであったと考えられる。したがって、他の東アジアの都にはみえない遷都という日本古代の都の特質が「京」における「京—四坊—坊」という行政体系、すなわち坊制を造り出したのである。

第三章「日本古代の複都制とその特質」では、まず天武朝の複都制が律令国家形成過程における中央と地方支配の手段の一つであり、難波・藤原京・信濃の三都制が計画されたものの、災害と天武の死により複都制政策が打ち捨てられたことを述べた。そして、聖武朝に造営された副都難波宮・京の造営は、平城京と山陽道の駅家の荘厳化に連動した事業であり、聖武朝の複都制の再導入は、多分に海外情勢に対応するものであった。また、唐・新羅の副都は都として特別な扱いがされていたが、難波京は京城自体が独立した行政領域にならず、副都設置以前の摂津職一郡一郷という行政体系のままであった。その上、京が所在した西成・東成郡ですら、行政上何ら特別な待遇を受けることはなかった。このことから、日本の副都は、都でありながら行政上は都として扱われなかったという特殊性を持っていた。

終章「日本古代における都城と遷都」では、第一部と第二部の結論をまとめ、次いで、八世紀の日本の都城が東アジア都に比べ極めて頻繁に移動しているのは、九世紀初頭まで天皇から公民至るまでが遷都の観念を持っていたためであったことを述べた。この遷都という観念の存在により、古代の日本は、唐・新羅に比べて遷都しやすく、都に不備・欠陥があろうとも、新たな都を造ることで克服することができた。そのため、唐・新羅のような首都と有機的に結合し、補完する複都制は日本では根付かなかったと考えられる。つまり、他の東アジアの都城にはない遷都という日本古代の都城の特質により、日本独自の都城に関する制度が生み出されていった。